

スルメイカの「寄り現象」について

浜部基次・清水虎雄

(日本海区水産研究所浦郷支所)

On “Yori” phenomenon of cuttle fish (*Ommastrephes sloani pacificus* STEENSTRUP)

Mototsugu HAMABE and Torao SHIMIZU

We have examined into what they call a “Yori phenomenon” with relation to cuttle fish (*Ommastrephes sloani pacificus* Steenstrup) which has been existed from old years on Oki Island, Shimane prefecture.

This local phenomenon has been existed from older times in this area with a primitive legend as well as religions tradition in connection with the Yurahime shrine here and is celebrated in this area as an attractive phenomenon.

What has caused this phenomenon? Namely, as a result of making researches in this cause it has become clear that the phenomenon originated from such a definite oceanic condition that a school of cuttle fish would be able approach satisfactorily by the rounding beach of Oki Island in Shimane prefecture, with an advent of their migration season, but they will not come to the beach for spawning.

This phenomenon presented on condition that in addition to the above-mentioned causes, a configuration of the beach and a state of the sea-bottom are being suited to induce a school of cuttle fish to the sandy beach, in other words, it has a configuration of the ground just like as a natural-made large set-net.

古くから隠岐島浦郷湾の最奥部に「スルメイカ」の群団が11月末から12月ごろ群をなして水際附近の浅い砂泥底に座礁することが知られている。これ等を採捕するものは、この現象を「寄りイカ」と称している。このような群が寄せて来る時は 100m² に満たぬ小湾に、数万尾にも及び陸上、水際水中、いずれも白一色となつて足の踏場もなくなるほどである。今回この現象について若干の考察を行ったので報告する。

「寄りイカ現象」の実例

(1) 浦郷町山良浜

昭和25年12月14日浦郷町渡夫妻が山良浜で経験した「寄り」は次のごとくであつた。

山作業のため14時ごろ山良浜沿いの道路を山へ向つた。その時既に山良浜湾口部遠く「バチヤリ、

パチヤリ」という「喰み音」がきかれたが、イカとは考えもせず、そのまま山に入り、17時ごろ同一経路で帰途についた。

そうして浜沿いの道に達しない間に、まだ明るい内湾全体が「スルメイカ」に占められ真赤に染っていた。

沖合からの進入群団は、浜内懐の道路屈曲部に一直線に当り奇妙な衝突音「グワサア」を發し、次から次へと前方に停滞している群を圧迫し、脈打つように水際のものが押し上げられ噴進してくる状態であつた。この時水際にはいわし群がまた同様に跳ね上つて「スルメイカ」と混在していたという。

(2) 浦郷町山良浜

昭和29年12月4、5日筆者等が山良浜で経験した「寄り」は次の通りである。

(A) 前後の状況

旧暦11月7日の12月1日から山良浜に急造した「イカ小屋」で待期した。

1日、17時(気温19.1°C、水温18.5°C、風向SE、風力なし、雲量10、薄曇り)歩行中汗ばむ程度であつた。ラジオ放送では当夜島後西郷沖合1~2裡で底曳船の一曳網毎に50~60貫のイカ漁獲を報じ、島後では冬イカ来ると全漁船の出漁を見た。当夜山良浜一带に「寄り」はなかつたが、翌朝赤之江側の湾入「大江浜」に「寄り」があつたのを通学生が発見した。

2日……(旧暦8日)

17時(気温9.6°C、水温18.0°C、風向NW注意報、雲量10)

3日……(旧暦9日)

17時(気温8.5°C、水温17.5°C、風向NW、雲量10、雨)

4日……(旧暦10日)

17時(気温12.0°C、水温17.5°C、風向W曇、雲量5)

18時 風やみ、晴れ、静穏なる月夜

19時30分 10尾寄る

20時 10尾寄る

20時30分 3尾寄る

22時 2尾寄る

筆者らの前面の浅瀬で緩速度の方向転換を行いくる。

5日3時風雨強く小屋を去る。

5日……(旧暦11日)

17時(気温12.0°C、水温17.4°C、風向W、雲量10、曇)この日は朝から雨で相当量の降雨があつたが、18時ごろから晴れ、風もやみ温暖となり、典型的な無風状態となり、温暖な月明の夜となつた。

現場山良浜……20時水温15.5°C、21時ごろ湾口部に広範囲な漣が立つた。丁度山良浜は無風のため鏡のごとく静穏であり、遠望がきいたので移動状態を正確に観察することができた。

群団は次第に小屋の前面へ移行し、水際に待機する筆者らの前面に迫つて来たので、筆者らは水際に面して、陸上から腕を伸し、又は籠で拾い取つた。

ついで21時10分ごろ沖合を彷徨する漣が、一際大きな波紋をたてて近接し、右岸側から左岸の松の陰影に向つて全群乗上げ、200~300尾が拾われた。

ついで21時20分ころ左岸側の沖合から近接し左岸に衝突した群(ここでも上陸)は右岸湾奥隅角部へ進み(ここでも上陸)ついで左折して小屋の前面の筆者らの処へ直進してきた。筆者は経50極、深70

縄のタモ網をもつて水中に入り、水際から3mほど離れたところ（水深30cm）で群団の先頭（耳先き）に当たつたため、網を群の進入方向に向けて待期していたところ、幾重にも魚体の重なり合つた帯状濃密部が自然に網中に突入し、小容器で30尾ほどを捕獲した。

以上の観察を要約すると(1)群団はジグザグ行進をなしながら湾奥部に入る。(2)進行前面部より後方部の方が群が多い。(3)障害物に衝突すると体を水中に垂直に立て、水面下に沈潜してから方向転換を行う。この際水面を鰭で打つ特有の水音を発す。(4)浅所で後続群に圧迫され、前方個体は行動の自由を失つているように見受けた。(5)単独のものでも直線的に水際へ突進してくるが、山影の水面に投影している左岸陰影部分に向つて、湾奥水際に平行前進するものが多い。

過去における寄りイカ現象と漁村

寄り現象が昔から見られるのは、山良の浜、船越、イカの耳、渡、獅子鼻、弁天浜であるが、隠岐島、東海岸、崎沖合4〜5哩の漁場にスルメイカ群の洄游停滞があるとほとんど同時に、山良浜へ「寄り」があつたので、古来漁業者はスルメイカ漁期開始の指針として、最初の「寄り」の後に、一斉に出漁するようになっていた。確實大量な「寄り」の時期にはイカを拾うことを生業とする者も多く、それによつてスルメを製造した。

スルメイカ漁獲の少い年、即ち一本釣で漁獲のない年でも「寄り」は少量ながら見られ、割合高価で取引され、イカを生餌とする「ブリ底漕釣」の餌料として使用されることもあつた。

明治年間、漁業法の公布とともに、地先専用漁業権「イカ掬い漁業」が設定され、保護区域として松山鼻以奥の他漁業を制限してあり、山良浜は本郷、赤之江、三度、珍崎、と浦郷町を構成する単位部落に権利の分割（浜分け）がしてあつた。

ついでこの特異な現象に着目した企業家により、保護区域外の島根鼻に移動群目的のイカ定置網が出現し、大正12年（'23）に島根及び弁天定置、大正13年（'24）に赤島定置、昭和5年（'30）に桂島定置と続々内海に定置網が設けられ、現在に至っている。（協同組合自営事業）しかし、この内海定置網の誕生は当然の帰結として、山良浜の「大寄り」は勿論、内湾東岸波止部落の浜、弁天湾入、獅子鼻湾入等に年々見られた「寄り」は前より相当少なくなつている。

結局、小屋掛けして待つ「寄り」という原始的方法による漁獲は、内海定置の増加によつて著しく減退したものとみられる。その他の部分的変化は大正4年（'15）船曳運河の開鑿を機として、美田湾奥の「寄り場」が変化し、又大正5年（'16）埋立垣の築造を機として獅子鼻湾入の変化もあつた。

なお、参考のために、当地で行われている「寄りイカ」と山良浜の奥に鎮座される山良比女命神社の伝説を紹介する。

浦郷町史の神社山緒によると、祭神である山良比女命は山良浦の豊石というところに烏賊を御手にもち芋桶に乗つて出現されたという。ある日、長い航海の徒然に海潮に手をひたしたところ淫奔者の烏賊共が比女命の手を引いて無礼をしたことがあつた。後程この罪を謝するため比女命が由良へ鎮座してから毎年きまつた季節に由良浜へ寄つてくるのが、ヨリイカだとしている。

知夫里島の伝説によると、当社はもと知夫里島イカ浜にあつて、イカの群がその浜に群衆していたが、神社を山良浦へ移されてから後イカはこないよになつたといわれている。祭神についての詳細は不明であるが、土佐日記（承平4年紀貫之）、神中抄（嘉永元年顯昭）にはそれぞれ「ちぶりの神」「ゆたすの神」として見え、海上渡航の安全を守護する神とされ、祭は「御旅の祭」といい、山良浦から浦郷の浜へ神輿を船で渡し、各村の者船列を組んでこれに従うとあり、社殿には「不開函」と称するものあり、内に甚だ古い量器(ます)らしきものの破片3個があつて伝説にいう芋桶に当るものか

と思われる旨の記載がある。

寄り現象に関する環境

地 形

寄り現象は、海岸のどこにでも生起するものでなく、特定の場所である。いまそれ等の場所の地形をみると、内湾部に面している海岸である。しかし、中の島と西の島とのなす水道ではイカ定置網もなく寄り現象も見られない。

最も寄り現象の見られる浦郷湾は水深く、波浪なく、多くの「寄りイカ」の発現が見られる。この内湾はイカ定置網の好漁場でもある。またイカ一本釣漁場としてもこの湾の中央部西寄りの部分を利用されている。Fig. 1 は隠岐諸島における寄り現象発現の位置とイカ定置網の所在する水域を示し、Fig. 2 は前記の寄り現象が発現する水域をさらに拡大したものである。



Fig. 1 Map of Oki island, Shimane prefecture

寄り発現場所の地形的特徴を考察すると、古伝による知夫里島のイカの浜海岸を除いて、それらの海岸地形は、ほぼ定置網型を形成している。また、そうした定置網型地形の最奥部には樹木が繁茂して、陰影をつくっている。

水温と比重

寄り現象発現時期の水温をみると、秋期より水温が下降して、17°C台の期間である。更に水温が下降しても時には寄り現象が発現するが、13°C台になると、殆ど寄り現象は、みられなくなると共に、一方内湾定置によるイカ漁獲高も甚しく減少する。

比重については、浦郷湾奥部の日水研浦郷支所前の定点観測によると、11~12月ごろは、24~25.00程度であるが、1月になると、若干上昇して、25.00内外となり、2~3月になると1月のそれより更に若干上昇する傾向がみられる。こうした例年の一般的な変化の過程において、特異的な比重が

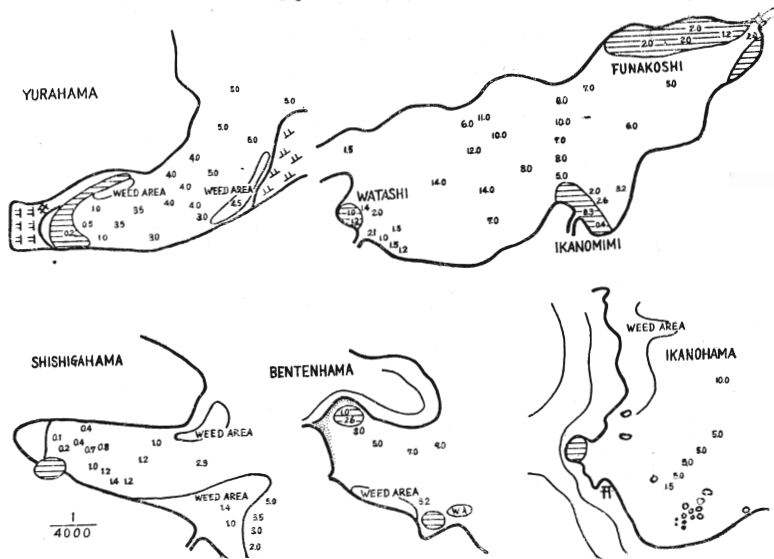


Fig. 2 Showing the detail environment in frequently occurring locations of "YORI" phenomenon in URAGO-Bay.

出現した場合にのみ寄り現象が生起するようには見られない。しかしながら、寄り現象発現時前後における隠岐島近海の家況をみると、イカの棲息域と考えられる島周辺漁場のうち底水温の分布を日本海海況概報によると、①1954年10月100m層では隠岐島の東北方から南方～東南方にかけて、冷水塊があり、それ等は隠岐島をなかば周幕し、島の周辺に15～16°Cの水塊によつて占められている。②75m層では、オキの島周辺にのみ18～19°Cの水温がみられる。これらのことは、隠岐島周辺にスルメイカの適水温が出現しつつあることを示すものであり、また一方スルメイカが、この水域に集約される性質の家況とも見られる。

10月以降表面水温が下降すると、スルメイカの游泳層も上昇し、12月になると10～55m深までイカ棲息の適水温となるのでよく浮上することが、石井('24)によつて知られている。一方沖合と湾奥部を結ぶ水深50m程度の連続した海底がみられるので、スルメイカの進入は容易であろうとみられる。

潮 汐

寄り現象発現の時刻としては、22～24時、0～3時の時刻は、上弦側の「ヨリ日」では大体月没時刻と合致し、また満潮時刻とも複合し、干潮時刻も前半の一部では近接している。下弦側の「ヨリ日」では、大体月出の時刻と合致し、また干潮時刻の前半で、更に満潮時刻は後半が合致している。これは、上弦側では、月没と満潮と干潮が時間的に甚だしく接近し、22～24時の間に続く場合に回数数量ともに多く、月没と満潮が接近して、0～3時の間に起る場合には減少している。

下弦側では月出と前半の干潮が、時間的に接近し、22～24時の間に起る場合に多く寄り現象がみられ、月出の時刻が0～3時で、満潮時刻とは3時間以上の時間差がある時には、ヨリイカの数量が甚しく減少している。

朔は月の出沒に無関係の暗夜で、1時40分頃の満潮が適合している。望は月の出沒に無関係で、1時45分頃の満潮と、20時25分頃の干潮とが適合しているが、朔及び望ともに寄り現象の発現は認められない。

したがつて、寄り現象は夜間22～24時、0～3時の間に月の出沒がなく、また満干潮のいずれか一方しかその時間中に起らない朔や望では発現しない。逆にその時間中に月の出沒があり、干満潮の両方かまたは一方だけでも出沒時刻に甚だしく接近して起る上下弦附近の日では発現するものようであるが、上弦9日に発現のないことや下弦22日に発現が2回あつてもその量が甚だしく少量であること等は説明出来ない特異な日を含んでいる。

照 度

スルメイカは夜行性が強いので、海中の照度の如何がその洄游に相当影響するものと思われるが、特に寄り現象生起時における海上及び海中の照度については、測定値がないのでどの程度の照度の時に最も寄り現象が生起するか定かでない。

沿岸定置網について、筆者等が調査したところによると暗夜よりも月夜に入網が多いことがわかつた。このことは、月夜程度の照度においては暗夜よりも沿岸に接近する事を示すものであるが、筆者

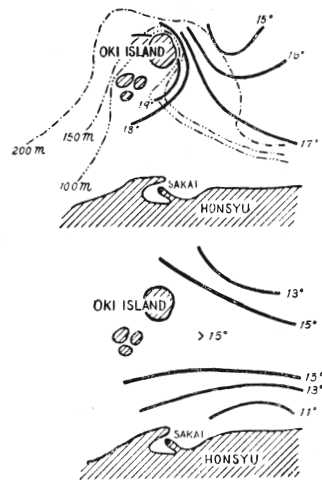


Fig. 3 Isotherms at the 75 meter depth (above) and the 100 meter depth (below) in Oki district (October 1954).

等の調査によると月明に13回、暗夜に1回の入網がみられた。

近海の漁況

寄り現象が生起した場合、この附近の定置網（桂島、赤島、島根）の漁獲状況を1950～1953年についてみると（Table 5）何れも顕著な漁獲のあつた日である。このことは寄り現象のスルメイカと定置で漁獲されるスルメイカが、沿岸へ時を同じうして、来遊することを示すもので、同一来遊群と見做すことが出来る。

また一方、寄り現象が生起する頃には、大羽イワシの漁獲が前記定置網においてみられるのが普通であるように思われているが、前記の定置網の漁獲統計によると、寄り現象の当日にはその近接前後にイワシの漁獲があつて寄り現象が生起することもあるが、そうでない場合もみられる。

寄り現象の発現時

季節

筆者等が今まで寄り期日の判然としているもののみについて調査（Table 1）したところによると寄り現象発現は次のように12月に最も多く生起している。この時期は、水温からいうとスルメイカの棲息適水温が、内湾に出現する時期である。

9月	1回	1月	1回
10月	1回	2月	1回
11月	8回	3月	2回
12月	18回		

時間

発現時刻については、15時から翌朝5時までの間に涉つているが、そのうちでもとくに22～24時の間にもつとも多く0時～3時がこれについている。

月齢

筆者らの調査によれば'50年～'54年の間に「寄り」のあつた日は27回あり、全期を通じて月齢のみに従つて検討すると、「寄り日」は月齢7日に5回、8, 10, 11, 21, 22, 23日に各2回、6, 8, 12, 13, 17, 18, 20, 25, 26, 30日に各1回である。

最多回日は7日、つぎの多回日は9～11日、21日～23日で、発現日は6～13日、17～26日の間で、上弦側14回、下弦側12回となり、朔及び望から離れ、上下弦附近で多発する傾向がみられる。

「寄りイカ」の形態並びに生態

「寄りイカ現象」の際漁獲される生体については、筆者等が1950年12月15日山良浜で採取した5尾（♀3, ♂2）の測定によると胴長21.5～23.0cm、体重210～260gr.であつた。また生殖腺重量は1.5～2.5gr.であつて熟卵は認めなかつた。

胃内容物を検したところイカ表皮の残つているもの2尾、イワシの充満しているもの3尾であつた。当時の群団は約2,000尾であつたので、以上の拾得し得た5尾では全貌を推知し得なかつた。

1954年11月5日の23～24時の間山良浜の「寄りイカ」の数量は約600尾であつたが、このうち50尾の内臓を得たので、これらを測定した結果からすると♂7, ♀43で♀が甚だしく多く、熟卵に近いものが4個体であつた。

また胃内容物を検するとイカ肉片のあるものが半数の25個体に及んでいるのは、相当盛んな共喰現象のあることが看取される。

「寄りイカ」として採取される群団は、当時その附近で漁獲される群団と同一のものか、或いはまったく異つているかを一応検討するため附近からの資料蒐集を行つた。即ち、1954年12月5日由良浜で「寄りイカ」89尾、内海定置で漁獲されたもの50尾、崎沖一本釣で漁獲されたもの50尾を測定した。(Table 4)

この結果によると三者間に甚だしい差異が認められないが、性比において若干の相違が見られるが、1954年11月5日由良浜「寄りイカ」では、前記の如く♂に比して♀の方が甚だしく多かつたので性比については、以上のみの材料では結論し得ない有様である。

隠岐近海におけるイカ産卵期について、石井(24)は「3,4月のころは、成熟したものを得難く、ことに♀において成熟せる生殖腺はもつとも少く、他の月には♂の生殖腺の成熟は大體平均し、♀の成熟卵は夏8月及び晩秋11,12月ごろの2季節にもつとも多く、大體において熟卵をもつとも多く有する季節即ち夏及び晩秋の二季をもつて産卵期とするのが正確であるだろう」といわれているが、'50年から'54年の間各月の漁獲イカについて、性比、♀群でアメ色の完熟卵をもつものとの比、卵巣重量の平均値について測定を行つたところによると、その調査材料が少なく判然とはし難いが次の結果を得た。

月	個 体 数		不熟♀ (不明♀)	♂	卵 巢 重 量
	完 熟 ♀	半 熟 ♀			
4	7	0	0	0	106.0 ~ 29.0g
5	12	0	0	0	51.7 ~ 20.1g
6	45	9	0	8	53.5 ~ 20.9g
7	12	1	0	20	52.0 ~ 24.4g
8	2	0	6	7	21.4 ~ 1.0g
9	9	0	19 (不明61)	42	28.5 ~ 4.5g
10	41	0	66 (不明30)	103	39.5 ~ 3.9g
11	8	0	90 (不明6)	26	28.0 ~ 14.0g
12	3	0	77(不明247)	344	12.8 ~ 0.6g
1	0	0	72	62	8.6 ~ 0.6g
2	3	0	52	40	12.1 ~ 1.3g

4月~7月の間には最大卵巣重量52.0~106.0grが出現し、4,5の2カ月間には完熟♀のみ19個体が採捕され、♂は1個体も発見されていない。

完熟♀の形態については胴の後方鰭の基部にかけて内に包蔵する熟卵の巨大な容積のため膨大し、頭部及び外套前縁よりも遙かに肥大して畸形のような外観を呈し、その外套の厚さも盛漁期のものと比較して薄く弾力を欠いた特異な形態のものである。一般に春から夏のものでは20gr.を境としてそれ以上の生殖腺重量のとき完熟卵が見られ、早春期のものでは12gr 附近で熟卵が見られるものようである。

石井(24)のごとく熟卵のもつとも多い季節を産卵期とすると、産卵期は4~7月となり、稚仔の出現等を考慮すると多少現況に不一致の傾向も現われ、産卵期については今後さらに検討を加えることとし、「寄りイカ」の当時の個体において熟卵をもつものが極めて少いことから「寄りイカ現象」が産卵と何らの直接関係のないことが判断される。従つて「寄りイカ現象」を発現するイカは、索餌のため内湾に侵入したものと見られる。

要 約

オキ島に昔からみられるスルメイカの『寄り現象』を調査した。この寄り現象と云うのは、オキの島の浦郷附近の海岸の波打ち際にスルメイカの群が游泳突進して、砂浜にまで乗り上げる現象である。このことは昔から存在し、其地の山良媛神社と結びついた原始宗教的な伝承さえもつているもので、興味ある現象としてこの地方で著名である。

この現象の起る原因は、スルメイカ来波期に当つて、スルメイカ群が、オキノ島周辺に充分接近出来るような一定の海洋的な条件であつて、スルメイカが産卵の為に接岸するものでない事が明になつた。

接岸したスルメイカ群が、更に接岸して、『寄り現象』を起すのは、前記の諸原因に加えて海岸の地形、海底の状況が、群団を砂浜に誘導する様な地形、即ち自然に出来た定置網の様な地形をもつている事が条件である。

終りに当つて御指導と御教諭を賜つた日水研所長内橋博士ならびに調査に協力を得た浦郷町漁業協同組合、経験を教示せられた坂本浅市氏、漁獲物の悉皆調査をさせて頂いた道前義勇氏に謝意を表する。

引 用 文 献

- (1) 石井四郎 ('24): 隠岐近海産二番柔魚漁業基本調査報告, 島根水試報告
- (2) 添田潤助 ('50): 日本沿岸に於ける“するめいか” *Ommastrephes sloani pacificus* (Steenstrup) の洄游に就いて, 北水試報告, No. 4.
- (3) 宮本秀明 ('34): スルメイカ漁況と海況に就いて, 水産学会誌, Vol. 3, 4.
- (4) 長谷川勝蔵 ('51): 日本産重要頭足類検索, 島根県浜田水産高等学校
- (5) 兎島俊平 ('54): 西日本海に於ける大羽イワシ漁況について, 海流勢力の消長と島根沿海の大羽イワシ漁況について, 海流瓶の漂着状況よりみたる島根沿海漁況の変動について, 水産学会誌, Vol. 20, No. 57.
- (6) 横山弥四郎 ('53): 浦郷町史

Table. 1 近年における寄り (古老記憶、日水研野帳記録、西郷測候所記録より)

年月日	時刻	場所	数量	備 考			其 他
				拾った時の天気	当日の内湾漁況 (野帳)	当日の天気、風 (測候所記録)	
1904年又は 1905年秋 (明37.38)	不 明	黒木村 獅子鼻 湾入	6,000尾				
(大5年) 1916年秋	不 明	黒木村 弁天鼻 湾入	1,400 "				
1938年 (昭 13) 旧11月 12日	23時	浦郷町 由良浜	23,000 "	月明, 無風			拾得者田岡4反 購入, 家屋新築
1945年 (昭 20) 11月23 日	23時より4回 に涉り	"	9,000 (和 船3艘に 満載)				旋回中の群団の先 頭を投石す。よつ て方向転換へよ る巡査拾得す。 1,000円相当拾得
1945年 (昭 20) 11月24 日	23時	"	不 明				
1950年 (昭 25) 11月21 日	23~24時	"	50尾	月明, 無風	いわし接岸甚し, 気温17.5°C, 地曳 盛漁	(野帳)14時~16 時小雨, 18時頃 より晴となる, 月明, 無風	そでいか2尾寄 る
1950年 (昭 25) 11月22 日	一 晩 中	"	不 明	"	"	(野帳)気温17°C 快晴, 無風	
1950年 (昭 25) 12月14 日	16~19時	"	3,200尾	曇天, 無風	曇時々小雨	曇, 最大風速時 風向 (WNW) 一日平均風速 (1.3)	
1950年 (昭 25) 12月15 日	17時	"	2,000 "	"	曇	曇 (NNE) (4.8)	
1950年 (昭 25) 12月27 日	23~翌2時	"	10,000尾	曇	いわし群由良湾 内に渦巻く (午 前10時)		
1951年 (昭 26) 3月3日	不 明	美田湾	不 明	雪		雪 (W) (6.4)	
1951年 (昭 26) 3月30 日	5 時	由良浜	6,000尾				
1951年 (昭 26) 12月9 日	不 明	"	不 明		曇内湾イカ一本 釣活況 (1隻平 均200尾)	曇 (WNW) (2.9)	
1951年 (昭 26) 12月18 日	23~翌3時 (7回に涉り)	"	20,000尾	月明, 無風	晴, 内湾イカ一 本釣大漁	晴 (WSW) (5.1)	
1951年 (昭 26) 12月19 日	16時	"	16,000 "	"	晴	(W) (3.9)	
1951年 (昭 26) 12月20 日	3 時	"	少 量 不 明	"	"		
1952年 (昭 27) 11月	不 明	弁 天 湾 入	"				
1952年 (昭 27) 12月7 日	夜 明 け	由良浜	200尾	月 明		晴 (NW) (2.9)	
1953年 (昭 28) 9 月	不 明	獅子鼻 湾 入	800 "				
1953 (昭28 年) 10月15 日	朝9時発見	"	1,000尾		水温23.1°C	前日14日, 晴 (NW) (2.6)	

年月日	時刻	場所	数量	備考			
				拾った時の天気	当日の内湾漁況(野帳)	当日の天気, 風(測候所記録)	其の他
1953年(昭28)11月28日	22~24時	山良浜	10 "	翌29日桂島内海定置, いわし 2,600貫	晴, (NNW) (2.0)		
1953年(昭28)12月12日	24時	"	100 "		赤之江, 由良浜間いわし群あり, 山良浜, いわし地曳網200貫漁獲	曇(W)(3.8)	
1953年(昭28)12月13日	不明	"	100 "	夜中より波が出る	SWの微風(入風)由良浜いわし群沖合に多し, 漁夫1日待期する	曇(WSW)(4.0) 最大風速10.8	
1953年(昭28)12月22日	24時	"	3,500 "	晴, 月明無風	晴	曇(ENE)(6.2) 最大風速11.7	
1954年(昭29)1月中旬	昼間	獅子鼻湾入	40 "	大魚に追われていた			
1954年(昭29)2月10日	"	"	800 "	既に寄つていて潮発見した時は鳥が啄ぼむ	するめいか今年初の大漁(定置網)	曇(WSW)(4.8)	
1954年(昭29)11月2日	23時	山良浜	150 "	月明			
1954年(昭29)11月5日	23~24時	"	600 "	月明, 無風温暖	晴 W1		
1954年(昭29)12月4日	19時30分~20時30分	"	20 " 10 " 3 "	"	22時以後風あり雲行き激し, 雨		筆者らイカ小屋にて待期観察, 17時水温17.5°C
1954年(昭29)12月5日	(3回)21~21.30 (1回)23~23.30	"	2,000 "	気温12°C, 月明, 無風, 温暖	6日午前3時より風雨となる	午前中より午後5時頃まで相当量の雨が降る	筆者らイカ小屋にて待期観察, 100尾拾う
1954年(昭29)12月12日	23時	"	300 "	20時頃より雲間に月が見え出し, 23時前後に晴れとなる	曇, 時々雨, Wの風強し		筆者らイカ小屋にて待期観察, 40尾拾う
1954年(昭29)12月17日	23時	"	1,400 "	月明, 無風	水温14.0°C(18時測定) 気温7.2°C(")		筆者らイカ小屋にて待期観察, 80尾拾う
1954年(昭29)12月19日	23時30分	"	100 "	SWの風, 気温9.2°C, 雲量7(17時測定)	水温14.0°C(17時測定)		筆者らイカ小屋にて待期観察
1954年(昭29)12月24日	23時	"	1,200 "	Wの風, 風力1(曇) 雲量7	水温13.0°C(17時測定) 気温7°C(")		筆者らイカ小屋にて待期観察, 50尾拾う
1954年(昭29)12月31日	19時	"	20 "	Wの風, 風力3 曇雲量6			筆者らイカ小屋にて待期観察

Table 2 寄りイカの解剖結果

(1950年12月15日の分)

月日	漁獲区分	胴長分布 Mode (cm)	体重分布 Mode (g)	性比	♀生殖腺重量 (g)	卵状態	胃重量 (g)	胃内容			肝臓重量 (g)
								いか	魚類	なし	
1950 12.3	崎沖一本釣	♀ 29~31 ♂ 23~24 ♂ 23~24	200~250 200~250	♀ 163 ♂ 166	缺測	測定なし	同左	♀ 112 ♂ 147	2 4	49 15	♀ 7~46 ♂ 45~21
" 12.14	内海定置	♀ 23~24 ♂ 23~24	300~350 150~200	♀ 6 ♂ 9	4.0~2.0	熟卵なし	♀ 6.5~2.5 ♂ 5.0~2.0	♀ 5 ♂ 2	0 0	1 7	♀ 缺測 ♂
" 12.15	山良浜寄りイカ	♀ (23)(23.5) (22.8) ♂ (22)(21.5)	210. 210. 260. 210. 210.	♀ 3 ♂ 2	2.5~1.5	熟卵なし	缺測	♀ 2 ♂ 0	1(充滿) 2(充滿)	0 0	♀ 缺測 ♂

Table 3 由良浜の「寄りイカ」生体の解剖結果

(1954年11月5日の分)

測定項目 番号	胃重量 (g)	胃内容	肝臓重量 (g)	性別	生殖腺重量 (g)	精夾, 卵状態	測定項目 番号	胃重量 (g)	胃内容	肝臓重量 (g)	性別	生殖腺重量 (g)	精夾, 卵状態
1	2.0	なし	17.5	♂	7.0	精夾多し	26	5.0	なし	24.5	♀	8.5	熟卵なし
2	3.0	イカ切片	40.0	♂	不明	不明	27	7.5	イカ切片	47.5	♀	5.5	"
3	4.0	"	38.0	♂	7.5	精夾多し	28	6.0	"	56.0	♀	24.0	◎熟卵
4	5.0	"	33.0	♂	不明	不明	29	3.5	"	24.0	♀	2.0	熟卵なし
5	2.5	なし	18.0	♂	10.0	精夾多し	30	13.0	"	53.0	♀	6.0	"
6	3.0	"	18.0	♂	9.0	"	31	5.0	"	28.0	♀	3.0	"
7	4.0	"	39.0	♂	9.0	"	32	8.0	なし	46.0	♀	24.5	◎熟卵
8	6.5	イカ切片	53.0	♀	5.0	熟卵なし	33	10.0	イカ切片	50.0	♀	7.0	熟卵なし
9	6.0	"	56.0	♀	12.5	"	34	11.0	なし	38.0	♀	6.0	"
10	15.0	"	36.5	♀	12.0	"	35	7.0	"	38.0	♀	15.0	"
11	6.0	なし	78.0	♀	25.5	◎熟卵	36	4.0	"	20.0	♀	7.0	"
12	6.0	イカ切片	46.0	♀	6.0	"	37	11.0	イカ切片	27.0	♀	4.0	"
13	6.0	なし	45.0	♀	7.0	"	38	7.0	"	52.0	♀	8.5	"
14	5.0	イカ切片	28.0	♀	15.0	◎熟卵	39	11.0	なし	69.0	♀	13.0	"
15	7.0	なし	36.0	♀	3.0	熟卵なし	40	10.0	イカ切片	58.0	♀	22.0	"
16	11.0	イカ切片	37.0	♀	4.0	"	41	5.0	なし	37.0	♀	8.0	"
17	7.0	なし	33.5	♀	4.0	"	42	4.0	"	32.0	♀	8.0	"
18	9.0	"	43.0	♀	10.5	"	43	4.0	イカ切片	36.0	♀	3.0	"
19	6.0	"	34.0	♀	4.0	"	44	11.5	なし	31.0	♀	9.0	"
20	5.0	"	37.0	♀	5.0	"	45	6.0	"	42.0	♀	3.0	"
21	5.5	"	53.0	♀	5.0	"	46	5.5	イカ切片	52.0	♀	5.5	"
22	4.5	イカ切片	30.0	♀	6.0	"	47	5.0	イカ充満	91.0	♀	4.0	"
23	6.0	"	50.0	♀	8.0	"	48	5.5	イカ切片	35.0	♀	4.0	"
24	4.5	なし	40.5	♀	4.0	"	49	4.0	なし	28.0	♀	4.0	"
25	3.5	イカ切片	35.5	♀	3.5	"	50	5.0	"	23.0	♀	8.5	"

備考 ♂の生殖腺はニードム氏嚢，遊離精夾を含む。♀は輸卵管經卵腺を切除。

Table 4 漁場及び漁具の異なる漁獲物の解剖結果

(1954年12月5日の分)

項目 月日	漁獲区分	胴長分布 Mode (cm)	体重分布 Mode (cm)	性比	生殖腺重量 (g)	卵状態	胃重量 (g)	胃内容			肝臓重量 (g)
								いか	魚類	なし	
12.5	由良浜 寄りイカ	♀ 24~26	300~350	♀ 36	♀ 2~4	熟卵なし	♀ 3~4	♀ 5	1	30	♀ 23.5~50
		♂ 24~25	250~300	♂ 53	♂ 6~8		♂ 2~3	♂ 6	3	44	♂ 17.0~73
"	内海定置	♀ 25~26	300~350	♀ 20	♀ 2~4	半熟 3	♀ 4~5	♀ 9	2	9	♀ 22~56
		♂ 24~25	250~300	♂ 30	♂ 6~8		♂ 2~3	♂ 15	0	15	♂ 14~55
"	崎沖 一本釣	♀ 25~26	300~350	♀ 33	♀ 2~4	熟卵 半熟 微熟	♀ 2~3	♀ 8	4	21	♀ 13~42
		♂ 23~24	200~250	♂ 17	♂ 6~8		♂ 1~2	♂ 1	0	17	♂ 10~29

